サンチョパンサ小賢しきことほざく

藤岡　純一

発行部数史上最高小説とされる「ドン・キホーテ」を読んだ。

岩波文庫では、「前編」が三分冊、「後編」が三分冊、各冊が四〇〇頁余りある。時間にゆとりのある私にとっては、読み通す意欲さえ萎えなければ、なんとかなる。

読書の動機は、バレエへの蘊蓄を増やすことだ。

バレエのドン・キホーテは、「幕モノ」と呼ばれるクラシックバレエ演目のひとつで、一八六九年ボリショイバレエ団による初演以来、世界のバレエ団で公演され続けている。オーソドックスな演出では、その全幕は、以下のとおり。

プロローグ　ドン・キホーテが風車と戦う。

一幕　バルセロナの広場の活況、キトリとバジルをはじめ町の人々の踊り。

二幕　場所は夜の山間、旅芸人たちとキトリとバジル。ドルシネア姫を探すドン・キホーテ。

三幕　再びバルセロナの広場、カマーチョとバジルの結婚式に忍び入るバジル。

騎士ドン・キホーテと従者サンチョパンサは、登場はするが、ダンスをするわけではない。町娘キトリと幼馴染の青年バジルの二人が主人公となって、そのさわやかな情交がダンスで表現され、ドラマとしては、親の決めた、いいなずけの金持ちの息子でチャラ男キャラのカマーチョとキトリの結婚式を前に、バジルが狂言芝居を打って、首尾よくキトリを取り返し、二人の結婚式が営まれて、大団円となる。ドン・キホーテは、ドラマのメインストーリーと関わりなく、ドルシネア姫を探し、サンチョパンサはその後ろを付き従う。

風車のシーンは、前編の第一分冊に現れる。ペン画の挿絵を探して、ページをめくれば、その箇所を見つけることができる。肝心のキトリとバジルは、容易に登場しなかったが、物語ドン・キホーテとの付き合いは深まっていく。

ドン・キホーテは、ドルシネア姫に仮託される理想と騎士道の正義を追い求める直情の人で、これは世界中の人々の少年時代の記憶に植え付けられたキャラクタそのものなのだが、従者サンチョパンサが、懐が深く、引き出しも多く持っていて、巻が進むほど、その魅力に引き込まれることとなったのである。

そして、そして、待ってましたの、キトリとバジルが、後編の第十九章（後編第一分冊・三一一頁）で登場する。三七二頁で、新婚ふたりのもてなしを後にして、ドンとサンチョは、次の冒険の旅に立ってしまう。岩波文庫六分冊約二四〇〇頁のうちのざっと六〇頁。風車プロローグ部を除くものの、たった四十分の一しかない。

いくつもの冒険が繰り広げられるなかで、全編を通じて比較的地味な内容のこのエピソードがなぜバレエのシナリオに取り入れられたのか、その所以に接したことはないが、この章に、「朗詠踊り」が登場し、踊りの説明がある。

……踊りの一隊は八人の妖精からなり、二列に分かれていた。一方の列は〈キューピット〉

に、一方の列は〈富〉に先導されていた……

それぞれ背中に名札がはられていて、キューピット列の四人は、〈詩〉・〈分別〉・〈よき家柄〉・〈勇気〉、富の列の四人は、〈気前のよさ〉・〈贈り物〉・〈財宝〉・〈平和的所有〉と書かれていて、一人ずつ、詩を朗読しながら、踊りを披露する。

この八人の踊りに、まずは、触発されたのではないか。シナリオ構成を進めるうちに、収まりどころがなくなる…現在のオーソドックスなドン・キホーテの演出では、朗詠踊りに対応するものは、ない。

キトリがキテリア、バジルがバジリオとスペイン語らしい名前になっているし、場所はバルセロナの広場でなくて、その近郊の村、カマーチョはチャラ男キャラでなくて、ふつうの金持ちの息子、といろいろとバレエとは違う点もわかった。

読書の初期の目的は達成されたが、物語は続く。

後編二分冊めでは、サンチョパンサは、国王に評価され、島の領主に抜擢されることになる。思わぬ出世だが、次のようなさまざまなことわざを駆使して、国王の奥様に好かれていたのが、幸いした。

〈蟻に羽の生えたが不幸のはじまり〉

〈法王様の体が寺男の体よりよけいに地面を占領するわけじゃねえ〉

〈光るもの必ずしも金にあらず〉

〈はらわたが足をささえているのであって、足がはらわたを支えているんじゃねえ〉

〈黄金を背負ったロバは楽々と山を登る〉

〈神に祈るも手ぶらじゃだめだ〉

〈そのうちやるよの二つより、さあお取りの一つの方が価値がある〉

サンチョが島の領主として赴任するにあたり、ドンと別れるに際しての二人のかけあいを次に引用する。ストレートなドンと理知を秘めたサンチョ、ステロタイプと思われがちな二人の個性がぶつかり合う。

「神様にかけて言わせてもらいますけど、旦那様」とサンチョが答えた。「…（略）…おいらの頭に今、この場にぴったりの諺が四つばかり浮かんだよ。でも言わねえことにしよう、〈よく黙するもの、そはサンチョなり〉って諺もあるからね」

「そのサンチョは断じてお前ではないぞ」とドン・キホーテが言った、「お前はよく黙するものどころか口さがないお喋りで、…（略）…四つの諺がどんなものか知りたいものじゃ。…（略）…わしの記憶はなかなかよいはずなのだが、何ひとつ浮かんでこないのでな。」

「こんなのより、もっとぴったしなのがあるだろうかね」サンチョが応じた、「〈親知らずと親知らずの間に指をつっこんではならぬ〉、〈わしの家から出ていけ、わしの女房に何の用だ、には返す言葉がねえ〉、それに〈水瓶が石に当たろうと、石が水瓶に当たろうと、ひどいめにあうのはいつも水瓶〉ってのはどうですかね。どいつもこいつも、この場におあつらえむきじゃありませんか？　要するに、誰も領主様とか自分に命令するような者とは事を

かまえちゃいけねってことですよ。…（略）…それから領主の命ずることに対しては、〈わしの家から出ていけ、わしの女房に何の用だ〉と同じで、返す言葉がねえはずだ。石と水瓶のぶつかりあいの諺なんぞ、目の見えねえ者にもよく分かる話さね。…（略）…お前さまもよくご存じのとおり、〈愚か者も自分の家にいるなら、他人の家にいる賢者より物がわかる〉ちゅうことだから」

「いや、それは違うぞ、サンチョ」と、ドン・キホーテが答えた。「愚か者は自分の家にいようと他人の家にいようと、何もわからぬものよ。愚鈍という土台のうえに深慮の建物がたつことなど決してないからじゃ」（後編第四十三章）

ドン・キホーテの騎士口調、サンチョパンサのコトワザ連発のかけあい漫才が私の頭にはびこるばかりの読書の日々が続き、外界からの刺激へのアウトプットをふたりの言い回しにコンバージョンしてしまうようになった。

退職金の一部を株式投資にあて、いくつかの幸運とアベノミクスの大波にのることができて、保有株式は雪だるま式（常套句をさければ、綿菓子が新しい綿をまきこんでいくよう）に膨らみ、個人投資家の端くれ（あくまで自負）に連なる資金運用を行うようになった。

半生にわたるギャンブル好きと変化する社会への好奇心、職業生活を通じて取得した知識・調査力など、それなりに資質を有していたことがフィットした。取引時間中、スマホ一つで、証券会社の提供するアプリを通じて証券取引所が運営する株式取引注文システムにアクセスし続けて、刻々の値動き追うことに専念できるフリーな身分もアドバンテージとなる。ウォーレン・バフェットをはじめ、この分野の名著とされる書籍や証券アナリスト資格検定試験の通信教材を読みこなす座学的な探求も怠らなかったが、いろいろやっているうちに、これが一番役に立った、身についたと実感するものができた。

ヤフー掲示板のファイナンスカテゴリの個別銘柄の書き込みをチェックすることである。

匿名の投稿者による投稿内容は、丁寧な文章で現状分析や知見不足の人に解説を提供するものもあれば、偏った主張、あるいは、ゴミそのものまで、千差万別だが、じっくり眺めれば、有益なものはおのずと選定できる。周りに相談できる人もいない中、異見に接することができるのは、自分のものの見方を客観視できる効用がある。

また、株価の波動を推定させる有力なデータでもある。

もとより、株価の波動に規則性はない。正しい株価というべき概念はなくて、「美人投票」に譬えられる（経済学者ケインズが譬えて言ったとされる）ように、自分が美人と思うだけでは株価につながらなくて、より多くの投資主体から美人と評価されているかを当てることが、正解となる。だから、株価が上るか下がるかのアノニマスたちの妄想を集約できれば、美人投票の結果に近づくわけで、掲示板は妄想を集約する格好の場、すなわち、美人投票所としての機能も有する。

おのずと私も書き込みするようになった。取引が重なっていくと、なぜ、この銘柄を取引するようになったのか、なぜ、このタイミングで買ったのか、売ったのか、自分のスタンス

・ポジションを記録しておくことは、有益なことである。時間の経過とともに、上場企業側に事情変更がないのに諸要因で株価は変動する、利益あるいは損失を確定させる際に、初志に立ち戻ることでより適格な判断につながる。自分だけが見るノートにしたためれば足りるとはいえ、スマホひとつで、いつでも・どこでも取引するスタイルからは、掲示板への書き込みが、後述の作用と合わせ技として、効率的だ。

賛同者勧誘作用もある。

株価が上がってほしいと思うときは、銘柄が人気になるように、推薦文を書く、いわゆる「買い煽り」、株価が下がってほしい（安く入手したい）と思うときは、その逆の「売り煽り」行為をする。賛同投票の仲間つくりのメッセージ発信である。内容は、法律に抵触しない範囲で、ある程度の「盛り」はありだ。信じる、信じないは、読み手の裁量。魑魅魍魎のネット社会になかで、もまれる経験も教材だ。単なる願望を叫ぶだけの落書きレベルのものから、もっともらしい論拠が加えられているもの、さらには、情報ソースのリンクを張るものなどなど、読み手の読解力が問われる。

さて、ここから実践編。

とある銘柄を一定量保有していたところ、東証一部に所属替えされることとなって、株価が上昇した。このタイミングを待って、持ち高を増やしていった戦術が嵌って、結構な含み益を得ることになった。しかし、いざ上場変更された以降は、株価としては、さえない日がつづいた。企業収益や配当に関する係数からすれば、売り払って利益を確定させる水準にはないと判断していた。

買い煽りの書き込みをする。自分のスタンスの確認でもある。

［某年四月某日］

東証一部昇格後のよくあるパターンで、下げさせられていますが、

下値は　しれています

上値は　しれていない

楽しみ膨らむ一方

その後、二か月ほど一進一退が続いたあと、ずるずると株価は下降を続け、含み益はなくなり、含み損を抱えることとなってしまった。いわゆる「逃げ遅れ」の状態に至る。しかし、下げ続ける理由はないと判断して、ならば、下がった価格はお安い、お得なお買い物だから、買い増しすることで、少しずつ平均取得価格を切り下げていって、反転上昇時に一円でも早く黒字に転じるようにする、いわゆる「ナンピン買い」を続けた。

［六月某日］

1,100 円から値崩れありましたが

支えまくりました

何人かの一人

含み損膨らむ一方です（笑）

せっかく反転したと思ったら
雑誌の取材に消極的なコメントを出されたのでしょう。
これが増幅されて会社四季報に載ったから、
皆さんの心の支えが弱まってしまったかな

［一週間後］

週に一度はナンピン買い

じわりじわりと損の額が増えていく。ナンピン買いを続けるのは、しっかりしたメンタリティを維持しなければならない。人間だれしも、得よりも損をしたくないという感情の方が強い。だから、ナンピン買いは、勇気がいる。しかし、自説に拘泥して、意地をはるのも禁物である。度を超しては取り返しのつかない事態に陥ることもありうる。週に一度ぐらいのペースを保てよ、とその心情を記録しておく。

こんな状況で、長大なドン・キホーテの読書が平行した。その影響で、わが脳内にドン・キホーテとサンチョパンサのかけあいが乗り移って、突然、書き込みの文体が変化した。

［七月某日　昼下がり］

騎士は勇気を持て、挑め
サンチョパンサ　起きているか？

［連投］

勇者のみが生き残る
修羅場じゃ　肉を切らせて骨を断て
ほぞを噛め　弱気公爵ども
いざ進まん　ナンピン天国へ

蟻地獄に譬えて、「ナンピン地獄」という言い回しは、よく使用される。ずるずると沼に引き込まれていくような状況から逃げ出したいのは、やまやまだが、そこを耐えて、辛抱を続けることで成功することも多い。しばらくすれば、眼前に天国が広がる。

［同日　夕刻］

控えおれ　弱気の公爵ども
少なき商いにより
抱え込んだ明日への糧（含み損）は
少なき商いにより
大きなる利を勇者にもたらすものよ
のう　サンチョ

［翌日　朝］

勇者は来たり
そこのけそこのけ駿馬ロシナンテは
果てしなき荒野を駆けぬけよう
弱気の公爵　乗り遅れるでないぞ

サンチョ　目を覚ましたか？
どうなるのか見当がつかなくなっている。
［同日　昼下がり］
午睡より目覚めよ　サンチョ
日計りの売りの軍勢は
ギリギリの戦いを挑んでおる
敵の勇猛を讃えんとするか
今ぞ反攻の時きたる
（たぬき眠りのサンチョが起き上がる）
ご主人さま　ご乱心めされまい
どなたか、がんばってください。
［連投］
桃の実が肌を染めるように
梅の実が香り潜めるように
機は熟したり
全軍総反撃じゃ　売れ売れ売れ
わしらは　しっかと身を伏せて　午睡するのみじゃ
こちらは、策がつきました。
［連投］
戦いは明日もある
またさらに日の昇る限り続くに
今日の負けは明日の勝利の糧とせん
［連投］
新たなる友軍の輩（ともがら）よ
参戦は、五日後と心得よ
その日まで　弓も矢も朽ち折れし
貧民軍の亡骸を　褥（しとね）に捧げてたもれ
［同日　取引時間終了直後］
モーロ人の肌のごとき
黒褐色の兵三人現れたり
黒のようで黒でない　見紛うな
貧民軍は戦力も気力も尽き果てたり
天国にて友軍の進撃を観照せん
黒の三兵は　すでに度々現れきたるが
長き戦略を蓄えておったるためしなし
三日連続して始値より終値が下がることを「黒三兵」という。株価が下降するサインとさ

れている。自らを敗走する貧民軍に譬えて、一層の自制をうながしている。

［翌日　取引開始時刻前］

買いは五日待て

今日明日反発したとしても上値ではねかえされるよう

昼寝時の動きを五日観察して

腰据えて始めるのが善

かの名言策士ウォーレン・バフェット公が申しておる

「投資には見送り三振はない」

これぞという絶好球を待って、打ち返せばよい

今日が四日めの友軍の御方

明日週末は素晴らしい景色に

遭遇するやもしれぬ

武運長久を祈る

明日は、買い注文の嵐で、風車はあっけなく壊滅されよう。ドルシネア姫が先陣をかけて、大量の買い注文を入れなさった…いや、閑散な昼下がりの一振の妄想か。一人のドン・キホーテ、あるいは、サンチョパンサが、取引板の向うにかくれているあまたの騎士・町衆たちにメッセージを送り続けながら、タイミングを計って売買注文をポチる。

ドン・キホーテは、ドルシネア姫を求めて、海賊の跋扈するハイリスクの海に怖気づかず飛び込む。サンチョパンサのように、時に緊張をほぐし、時に理を諭してくれる従者がいてこそ、冒険の旅は続けられる。

上げ潮のない引き潮はない。来れば、大波だ。